大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

ぷらっとシネマ　問題は支配者の病気なのか『ザ・コーポレーション』（M・アクバー、J・アボット監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15458

萩原弘子

問題は支配者の病気なのか——『ザ・コーポレーション』（M・アクバー、J・アボット監督）

支配者といえば、かつては教会、君主、政党であった。現代世界で巨大権力をもつ支配者は企業（コーポレーション）である。株主のために、より多くの利益をあげることを目的とする。人間ではないが、企業活動の行為主体であり、権利能力を有する法的人格、つまり「法人」である。映画は、企業法人がまだたいして力をもたなかった150年前を振りかえることから始めて、戦後の飛躍的発展と、その果てに招来した地球規模の危機を描きだす。ここで企業法人は精神科医の診察台に寝かされ、その行為から人格が分析されていく。

キャシー・リー・ギフォード社がホンジュラスに置く縫製工場は、低賃金、長時間、苛酷な労務管理のいわば「奴隷工場」だ。製品タグには「収益の一部は世界の子どもたちに」とあるが、工場では13歳の子どもも働く。症状——「他人への思いやりがない」。

モンサント社が1993年から販売する遺伝子組み換え牛成長ホルモンは、アメリカの乳牛25％以上に使われているという。搾乳量増の効果はあるが、乳腺炎が発症しやすくなる。それを抑えようと抗生物質が牛に投与される。結局、消費者は牛乳とともに人工ホルモンと抗生物質を摂取させられる。発癌性、耐性菌増加といった危険を報ずるテレビ番組が製作されたが、結局放送されることはなかった。表現の自由と真実の報道よりも、企業利益に奉仕するメディア産業の実情が生々しく衝撃的だ。症状——「利益のためなら嘘もつく」。

こうして次々と企業の所業が分析され、症状が告げられる——「関係を維持できない」「他人の安全に対する配慮がない」「罪の意識がない」「社会規範、法に従えない」。企業法人に下される診断は、サイコパスだ（字幕では「人格障害」と訳されているが、この英語は、「心理的に病んでいる人」「精神病者」の意）。

現代世界におけるグローバル企業の横暴を知り、それへの批判的視点を培うには必見の映画だと思う。それでも私は、見終わったあとに残る違和感を告白しないではいられない。この違和感は、いったい何だろうか。

ここには職業、立場を異にするおよそ40人の話し手が登場し、カメラに向かって話す。そのなかで、企業法人と直接対決した第3世界からの発言者は、ボリヴィアで水道事業民営化を覆した民衆運動リーダーだけである。

他方で、グッドイヤー・タイヤ、ロイヤル・ダッチ・シェル、ファイザーといった世界のトップ企業の最高経営責任者（CEO）は何人もが、カメラの前で話す。なかには、北の資本による南の労働搾取を、南からの要請にもとづくものと強弁する者がいる。またCEOといえど強大権力をもつわけではなく、それぞれは人権や環境を気づかう「善良なふつうの市民」であるとアピールする者もいる。監督としては、とにかく言わせるだけ言わせて、あとは映画の文脈が、彼らの発言の意味を見えるようにしてくれるさ、というつもりかもしれない。しかし、ノアム・チョムスキー、ヴァンダナ・シヴァといった、アメリカ資本、政府、グローバリゼーションを批判する論客と同列のコメンテーターとも見えるため、CEOの発言を字義どおりに聞く者もいるだろう。

ただしCEOのなかで、インターフェイス社のレイ・アンダーソンだけははっきりと別格の位置を与えられている。この世界一のカーペット会社CEOは、みずからの企業活動を環境破壊的なものから環境にやさしいものに転換するに至った覚醒を語る。同社は「よい支配者」であり、現代世界が直面する問題の成功した解決例としてここに登場する。その発言が環境問題に終始していることには、監督の関心は向いていない。

私が違和感を抱いた理由の一端は、ふつうの市民を気取ろうとも、自覚的支配者としてエコロジーを説こうとも、要するに、世界で最大の発言権を有する人々の話を改めて聞かされることにある。企業法人が君臨する世界の最下層で呻吟する者の声は、研究者や活動家を経由してしか聞こえない。考えてみれば、この違和感は、企業法人にサイコパスと診断を下すという、映画の姿勢そのものに関わるものかもしれない。いったい奴隷労働、南北経済格差、環境汚染、生命環境の危機といった問題は、企業法人の「病気」に由来するのだろうか。「支配者の病気」という問題の立て方で、「支配」の問題に迫れるだろうか。それを議論するためにも、むろん是非見てほしい作品である。

（2004年、カナダ映画、145分）